

# 會津藩教育考

小川渉

著



「ならぬ」とはならぬ  
日新館教育の根本史料

小川渉

著

〔限定三五〇部復刻〕



安部外作此ノ事ニ  
ナリテモ此ノ事ナ  
シテモ此ノ事ナ  
シテモ此ノ事ナ

となし、父兄もまたその朋友あるを頼みるしなり、故に子弟の成長は教師の訓誨と朋友の忠告と相待ち、自ら諒らせずして成り調ゆる習ひ智と長じ、化、心となりて打格して勝えざるの恵ひならしめしものにして、彼の宋の呂和叔が徳業相勸の過失相規し、醜俗相交り患難相植ひ、善あれば則書し過ありおよび約に違ふものもまたこれを書す、三犯して罰を行ひ後治ざるものはこれを絶つるの懲約に異ならず、學校より學館に至るその轍一にして二ならず、即ち蘭語の風となりしその蘭船を知らざりしが、初め寛政三年八月十六日の教令(文政門)に淵源し、續て文化二年幼年志心得の證書を發せられし等、當時の司成、司業、誦師等相誘掖薫陶し仕長その他の年長輩が互に忠告するの際、自ら風をなし郷約となりしなるべしと今に於て推考せらる。  
○かくの如きの際にして郷里相分れ幼年者は交際せざることなれば、他の郷里の年少と相争ひ、一人の一事蕊末のことより棒大となり遂に分争となることに數回あり、その事や自己に關せざることゝとも朋友間の情誼これを傍觀すべからず、その塾内に於て發したる時には火鉢を投ぐるあり、机を抛つあり、障子を取て相打つあり、互に鬚髮を卷るあり、殺氣相立ち混亂の間鬚髮を抜くもの時としてなきにあらざり、初より抜くの意あるにあらず箱相打たんとす遂に劍挺に至るなり、此時や年長者は誰となく此となく掻き分け遮護へ廻りて鎮りし後仕長打寄り残らず訊問して素直所勤に報じ、素直所勤は儒者に報じ、儒者は學校奉行の意を伺ひ、重きは南北素讀所に退くあり、これは十中一、塾を替へて教ふるあり、外出を禁じて慎ましむるあり、輕きは誦切讀と稱ひ素讀所の別房に入れ時刻を以て仕長交るべく附添ひ起えず讀ましむる等の罰に處す、みなその改悛の意に外ならざるなり、抑少年者事あるに當りては各その力を費さざるを得ず、その盡さざるものに至ては取るにも足らぬ怯弱者に、其強者は陽にはこれを罰せざるを得ざれど、陰には年少者の振興を期し引立てしことにて、この加減は教授者の苦心せしことなりといふ。  
按ずるに誦切讀は初め役付の内にて付添ひしを、弘化四年より誦釋所生の内輪番にて附添ふことゝせられし旨續日記類密續編に見えしが、その後改められしと見え宋文の如くにてありき。  
○文武とも師範死去したる時は門弟心喪を厭する三日なりしが、そのうち深く恩徳を受けたるものは心次第に延ばし服したり、また先師の忌年に際すればその流岐の師範役付等施主となり、門弟とも幾分の香花料を醸出して追福の典を舉行せり、女は寺院に於てするあり、武はその稽古場に於てするあり、みな意前に拜禮して書は席常をなし武は互に試合するを例とせり。  
○寛政の間には壯士輩猪苗代湖水に赴き、行舟の術を稽古せりこれを稽手修行といへり。  
因に云船はスクーネル形にて、江戸より船匠を召して造らしり、房州竹ヶ岡陣屋にて行舟に熟練せし竹田勝太、野中三平等その運轉を教へしことありき。  
この修行の閑けしは近きことにはあらず、天和元年正月諸神六兵衛(武藏守) 船手の業に鍛錬なるを以て

## 内容見本

(62%縮小)

此ハ其ノ事ヲ其ノ時  
此地ニ其ノ事ヲ其ノ時  
此地ニ其ノ事ヲ其ノ時  
此地ニ其ノ事ヲ其ノ時  
此地ニ其ノ事ヲ其ノ時  
此地ニ其ノ事ヲ其ノ時  
此地ニ其ノ事ヲ其ノ時  
此地ニ其ノ事ヲ其ノ時  
此地ニ其ノ事ヲ其ノ時  
此地ニ其ノ事ヲ其ノ時

## 起稿始末

小川 渉 著  
野口信一 校訂

問合なりしに、數十人の内誰一人突出す者なく互に足を止るべきと、隈み合ひ數刻を移したれば師範は其殺氣の立ちしを見て急に馳合して鉞を擧だしめれば、雙方鉞を地につけ一人一槍を試みし者なく退きしことありしと口傳に存しぬ。  
成敗の刑(斬)を行はる、時は、三流輪番に藥師堂河原の刑場に出て首を突きき、これ刑法に據る所に於て額面三所を突くなり、其法首を地に埋め額のみに出して上に板を掲げ、二人にて板の兩端を押して動かざらしめしなり、こは老功、陰以上の者各自の槍尖もて鉞を試ししなり。  
何れの流岐も槍具はみな學科役所より下附ありしが、寶藏院流の槍具はその製造も密にして且つ多かりければ、出精勉強する者は自費にて調べ、又は自ら製して用ふる者多かりき、すべて各自の持槍を製せんとするには必ず先づ其槍の柄とする楯材を購入し楯材にて遺ひならして後製するを常とせり。  
按ずるに楯具の治革はいと考ふべからずと雖も、大内一智の二流は古昔よりのまじなりと思はる、而は大同小異なれど寶藏院流のは大内流と同一楯子一本なれど楯子は密にして、其上兩端には鐵革の幅一寸許りなるを縫付して楯及を防ぎ、一旨流のは楯子三本楯子三本にて額と額とにつこ(小)す(大)をあて冠りき、畢竟面子の線密は楯の穴小によりしなり。  
もと三流の諸生の内陸、目録、老功以上の者相會して一年二回づつ仕合せしを、弘化元年より一年一回とせられし旨續日記類密續編に見えしが、いつの頃よりか絶えて後には只その親友の間に於て

編者「日本外史之内  
(詳見此書卷之六)

與せられたり、蓋し厚く獎勵せられしならん。

按ずるに寛政三年正月家督相續の後小普請料差出し居る三十歳以上のものは、當人の望に任せ一二藝に傾き修行すべき旨家世實記に見えしが、これ傾修行の濫觴ならんか。

○三百石以下の子弟十七八歳より年長けしもの、修行の様は、休日或は朝飯の前は家園の蔬菜を培養するあり、馬を飼ふものは厩を掃除し乗責めたる後には蹄を洗ひ秣を給する等日常のことにして、春秋の二季休日には山野に行き秣を刈り薪を樵り、夏時には河水に漁する等賤業を厭はず家事を勤めて、會業には文武の間に身を寄せ夜間にもそれらの内會あり、時には賜米を春くが如きもありて、肢體は充分勞したるが上にも心神もまた費したれど、互に強壯を以て誇りあへりき。

○武藝は入門して後退て他の門に入らんことを欲すれば、その事由を詳記して學校奉行に出せば、許されたり、また師範に對し弟子の禮を失ふが如きことあれば、師範より退門を命ずることありき、その時には師範よりその事由を學校奉行に届け、學校奉行は審按して處罰すべきなれど、その父兄もしくは親戚のもの師範に謝して事罷むもありき。

○幼年生が學校、學館に入りてより長幼の序を重んじ、互に仁を輔け英を毓するの道また備り至れり、十歳學に入れば初めて郷里の朋輩と交際するの約あり、八時半時今の午後三時退校するや家に歸らずして朋友の宅に會し、團樂長幼の序を以てし、その年長輩十三四歳のものは年少輩に告るに、父母を尊び兄を

敬ひ弟を愛し諸藝の師長は父と同じく尊ばざるべからず、また出校の順序校内の行儀より家事に勞すべき等仔細にいひ聞かせ、また他邊我が郷里外の謂ひのものとは決して交るべからず、若しこれ等より無禮を加へらるれば決して負くべからず等のことを毎日反覆いひ聞かせ、もしその説諭に戻りしものあれば別に説諭を加へて改悛せしめ、若し改悛せざるに於ては尙年長者十五六歳のものに謀りて絶交し、その旨を

父兄に告げその日より敵視して打擲するが如きことあり、遂に改悛の効を見るに至りては再び交際を復し相親む故の如きなり、もとその人を惡むにあらず全くその改悛を希望するの意なるなり、然れどもその者強戾にして改悛せざれば生涯絶交して相齒せざるなり、この會集たる日々のことにして休日は午時より縦に闕席するを許さず、毎日その例話を終れば坐を亂し、詩骨牌唐詩選五言絶句の起承と轉結を分け書したるものにて歌骨牌の上句と下句とを分ちしと同じを取り勝負を競ひ、期節によりては的場ある家に會せば弓射ることなどして散するを常とせり、その十四五歳よりは午後は武藝の課あり、且つ年少輩と伍たるべきにあらねば十七八歳のも

のと夜間相會せり、この夜會には十三四歳にして加はるもあり、晝間年少輩が決し兼る等その大事絶交等のことに係るものの決を取りしなり、夜間の談話は自ら異にして忠臣孝子の美事を談じ、或は文武に裨益ある諸記録、御家訓、諸軍令などにつき談話し、交情親密にして晝夜相馴るることなれば自然死生相許し他郷人と分争イサカふが如きことあれば、他人に後れず奮闘するを榮とせり、故に少年輩の一身は朋友間相互の情誼約束によりて檢束したるものにて、父兄師表の訓誨よりはその約束を重んずべきも



# 『会津藩教育考』の希少価値

作家 中村彰彦

江戸時代には幕府の創設した昌平坂学問所を官学といい、諸藩が藩士子弟の教育のためにひらいた学校を藩校、あるいは藩学と称した。

笠井助治博士（元福井大学教授）の調査によれば、かつて存在した藩校の数は延べ二百九十五校である。（『近世藩校一覽表』、『近世藩校の総合的研究』所収）

ところでこれらの藩校のうちもっとも水準が高かったのは、会津藩校日新館と佐賀藩校弘道館だったという通説がある。まずはこの説の当否を、私なりに検討してみよう。

おことわりしておく、諸般の藩校を抜群の成績で卒業した者は、藩庁から昌平坂学問所への留学を許されることになっていた。だからこの官学が受け入れた留学生数を藩別に見てゆけば、藩校のレベルはおよその見当がつくのである。そこで鈴木三八男の労作『昌平翼物語』によって、弘化三年（一八四六）から慶応元年（一八六五）までの二十一年間に昌平坂学問所への留学生を多く輩出した藩のベスト・3を書き出してみると、つぎのようになる。

①佐賀藩三十五万七千石、四十人、②仙台藩六十二万石および薩摩藩七十七万石、二十一人、③会津藩二十三万石、十九人。

藩士ないしその子弟の人口は、およそ藩の規模（石高）に比例する。それを考えれば、会津藩の留学生の割合は仙台藩や薩摩藩のそれをはるかに凌いでいたことになる。すなわち東の会津藩と西の佐賀藩は、やはり通説の通り、その学生たちの質の高さにおいて双璧をなしていたといつてよいのである。

それにしても会津藩領は内陸部にあつて気候も厳しい地域なのに、会津藩はどうして優秀な学生たちを育成しつづけることができたのか。それを知りたい向きは、小川渉の畢生の大作『会津藩教育考』を読むに如くはない。会津藩の教育は日新館教育と呼ばれていたが、日新館教育の歴史から内容、藩校の運営方法、有功者略歴に至るその全貌は、今や希少価値のある本書にあまさず語り尽くされているからである。

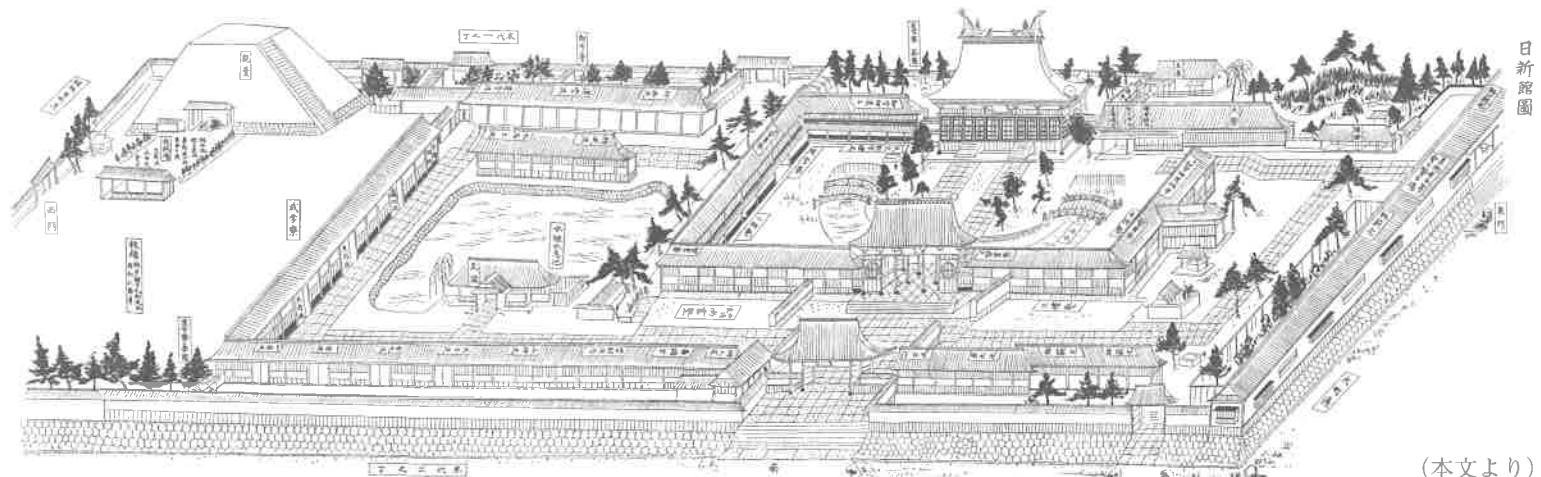
私事をいえば、私は処女長編『鬼官兵衛烈風録』から近作の『落花は枝に還らずとも 会津藩士・秋月悌次郎』まで、ひたむきに生きた会津人の人生をたどる歴史小説を多く手掛けてきた。その執筆中、つねにひろくのは『会津藩教育考』にほかならなかった。主人公たちが日新館でなにを学び、なにを自身の骨肉としたのかを考えるにあたっては、日新館教育が学生たちに求めた知的レベルと倫理観とを頭に叩きこんでおかねばならなかったからである。

さらにいえば、戦後教育は相も変わらず不動の立脚点を見出すに至つておらず、国際的な共通テストの結果を見ても日本の青少年の知的レベルは低下の一途をたどっている。毎日のように報じられる少年犯罪の多さと異様さには、声もない人々もさぞ多いことであろう。

このような悪しき傾向を考えたとき、思い出されるのが「ならぬものはならぬものです」とした会津藩の幼児教育であり、これをもとによくシステム化されていた日新館教育である。藩祖保科正之の教えに従つて風儀を尊び礼節を重んじた日新館にあつては、藩校は国家有用の人材を育成するところと明確に意識されていた。さればこそ学生たちは文武両道に励んだのであり、犯罪者予備軍や拝金主義者の生まれる余地などはあろうはずもなかった。

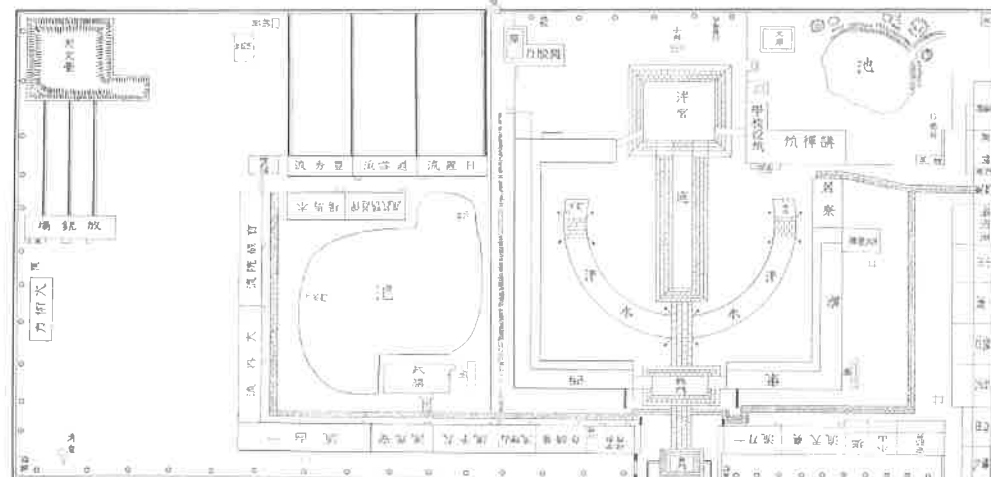
近年、国の将来を案じる者たちが現代教育へのアンチ・テーゼとして日新館教育に言及するようになったのも、ようやく上記の事実が気がついたためかと思われる。その意味でも、このたびマツノ書店が『会津藩教育考』の復刻に踏み切ったことはまことに時宜を得た好判断として高く評価したい。

もって本書を、江湖にひろくお薦めするゆえんである。



日新館図

（本文より）



会津藩教育考巻一  
第一日新館図



# 『会津藩教育考』復刻を祝して

会津若松市立会津図書館 館長 野口 信一

会津藩教育の萌芽は寛文四年（一六六四）に創設された稽古堂に始まる。民間の学校として建てられた稽古堂は、庶民のほか武士も共に学ぶ学校であった。初代藩主保科正之はこの誕生を喜び、免租地とするなど援助した。その後、幾多の変遷を経て享和元年（一八〇一）日本有数の文武両道の藩校日新館の造営に繋がり、会津藩精神の涵養が図られたのである。本書はその文武に渡る会津藩教育の全貌を詳らかにしたものである。

著者小川渉は天保十四年（一八四三）父常有が弓術師範であった関係で日新館内に生をうけ、そこで学び、そして教えた人である。渉は選ばれて江戸昌平黌にも遊学、慶応四年（一八六八）戊辰戦争では外国人から鉄砲弾薬の買入れ調達にあたった。敗戦後は新潟在住の蘭人カステルの家に潜居し英学を学び、広沢安任らと藩主松平容保父子の幽閉を解くべく、西郷隆盛やアーネスト・サトーらを訪ね奔走した。その後斗南藩立藩に伴い下北・斗南へ移住、辛酸をなめた。廃藩後は青森で役人生活の後、青森県最初の新聞「北斗」などで健筆を振るつたが、七年間の記者生活中筆禍による投獄も度々あった。明治十九年八月長崎県尋常中学教諭、二十二年辞して故郷会津にもどり教育考の執筆に専念、三十二年再び青森に移った。文筆に秀で事実を追求する勝れた能力ある渉は、本書を著すのに最適な人であった。

本文は教令、学史、素読所、講釈所、書学寮、礼式方、数学方・天文方、弓術場、刀術場、古人事歴、等々の他、別録として藩士の教育に関する建議・意見書等から成る。学史・寛政三年の項には採用こそ成らなかったが、儒者上田文長の当時では珍しい女子教育に関する先見的な意見書や文化三年の日新館における日本初の学校給食の詳細、また同じく日本最初のプール・水練水馬池での水泳訓練など興味を引く項も多い。

戊辰戦争によって日新館は灰燼に帰し、資料は焼亡、散逸し、資料収集は並大抵のことではなかった。また執筆にあたっては実見の記憶のほか、古老、同僚に幾度も足を運び、文を往復して正確さを第一に心がけ、さらに出典まで明記している。

教育考の原本は七巻からなる。会津若松市立会津図書館には小川家ご遺族などから寄贈を受けた自筆の稿本が二種伝えられる。一つは「会津藩教育考」ともう一つは後述の「起稿始末」を含めた最終原稿である。いずれも筆書きの端正な書体で記されるが、「始末」によると第二稿が成ったのが明治十六年十二月、さらに資料の渉獵、秋月胤永、南摩綱紀、広沢安任らの添削、推敲を重ね、十八年十一月に第三稿、その後も調査は進められ最終脱稿の年月は明治三十年代と推測される。「教育考」には秋月らの青字、赤字が入れられ、最終稿に比べ記述量に差があることが分かる。『会津藩教育考』は昭和六年会津藩教育考発行会により非売品として刊行されたが、渉は明治四十年六十五歳で亡くなっており、本の完成を見ることは無かった。その後、復刻版として昭和十六年井田書店、昭和五十三年東京大学出版会から出版されている。

今回マツノ書店の英断により巻末に小川渉の手稿「起稿始末」を付することができた。もちろん初出であり、本書執筆の動機、資料収集の記録などが記され解題ともいえる文章になっている。明治十六年から二十年までに渡る函館から長崎まで資料探索収集の記録、旧藩士を訪ねての事実の確認の様子が記され、あくまで史実を追求する渉の姿が伺える。また中級藩士の系譜集である「御通系譜」が存在し、戊辰の戦火で焼失したことなど初めて明らかとなった事も記される。そしてその末尾には「古を慨し、今を嘆じ、暗涙滴々紙上に墜ち、涙痕を拭ふの違あらざりき。この書の一名を涙痕と名く」と記し筆者畢生の作であったことが知れる。

また本書刊行についてその緒言は言う。「近来、世道人心大いに弛廢し、悪思想天下に蔓延するに当り、憂国の士にして会津藩教育に注意を惹き、その資料を求むる者少なからず。この要求に応ずる良書にして本書に過ぎるものあらず」と。

この頃同様、道徳観念が薄れ、武士道精神が再認識される昨今、古に学ぶことが必要である。「ならぬことはならぬ」に代表される幕末動乱期の会津藩、武士としての信念を一途に通じた会津藩士の精神性、その教育の根源を知る上で欠くことの出来ない資料として広く本書を推薦する。

## 目次

第一巻	日新館図 教令
第二巻	学史上
第三巻	学史下・素読所・講釈所・神道方 並和学所・書学寮
第四巻	礼式方・数学並天文方・医学寮・ 雅学方・武講並土圍場・弓術場・ 馬術場・刀術場・砲術場並大砲方・ 柔術場並居合術場・水練場・居寮・ 開版方
第五巻	南北素読所・宅稽古場・江戸邸並 猪苗代学校・市村学事・役員・学 資収支・雑事
第六巻	古人事歴
第七巻	別録 参考年表・生駒直乾建議書・田中 玄宰建議書・澤田名垂意見書・有 功者略歴・老荘問答
付録	
起稿始末	小川 渉
起稿始末「注」	野口信一



■本書は、いま各方面から脚光を浴びている会津藩教育の実体を具体的に知ることのできる、唯一の根本史料です。

■中村彰彦氏のご推薦により、厚かましくも本州最西端からこの名著を復刻させていただきますが、刷り部数が少なくして申しわけございません。

もし本書に興味を持つお方や機関があれば、教えてくださればパンフを即日直送いたします。極少数部数のため、売り切れてからではどうにもなりませんので、とりにそぎお願いまで。

■体裁 莪判貼箱入 七五六頁

■特価 一万二千元（〒500円）  
（特価締切二月十日・定価一万五千元）

■発売 平成十九年一月十日

■限定三五〇部（番号入）

■刊行と同時にPRにつき売切の節はお許し下さい。

▼書店不卸 ▼分割払可 ▼返本OK

山口県周南市銀座2-13  
0834-2195 **マツノ書店**